

Update Information:

2026/07/12/ 2:05 PM

◆各話へのクイックリンク

※設定資料を飛ばして、本編を読まれる方は、クイックリンクを使って飛ばすことができます。

□[本編](#)

Copyright@2026 D's

設定資料

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

ゝクリスマス特別編ゝ

夢雄 美侶

設定資料

タイトル

あらすじ

シリーズ構成

記号

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

・クリスマス特別編（短編）

小村は美優と、吉賀は松子と、クリスマスの日に上手くいかず、そんな二人が
出会ってしまった。ラブストーリーは突然に。正に二人のクリスマスタイム

・「私が工業高校に進学した理由 一学期」

・「私が工業高校に進学した理由 二学期」

・前編 第一話から第四話まで

・後編 第五話から第十話まで

★本作

・「私が工業高校に進学した理由 三学期」

□第〇幕 サブタイトル

○場所

▽ト書き

登場人物

小村 健一（こむら けんいち）（十五歳）

高校一年生（増本中学校出身）
イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で
世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）（十五歳）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白
カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子
海外生活のため、露出など気にならない性格
小村のことが好きである

○吉賀の住むタワーマンション

新增山（しんますやま レジデンス）
五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

目次

目次

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

設定資料

あらすじ 小村は美優と、吉賀は松子と、クリスマスの日に上手くいかず、そんな二人が

出会ってしまった。、ラブストーリーは突然に。正に二人のクリスマスタイム

シリーズ構成

記号

登場人物

目次

クリスマス特別編

サブタイトル 「小村 と 吉賀」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 吉賀のマンションの前で

Copyright@2026 D's

Copyright©2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

クリスマス特別編

夢雄 美侶

サブタイトル 「小村と吉賀」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□第一幕 吉賀のマンションの前で

○吉賀の住んでいるマンションの前

吉賀 松子を駅まで送って、帰ってきたところ

▽吉賀 マンションの中に入ろうとしている

▽小村 自転車を漕ぎながら吉賀の家の前を通りかかる
遠巻きに吉賀の姿を見つけ、声をかける

小村

「吉賀」

▽吉賀 小村の声に気づき、振り向く

小村が自転車に乗って向かってきているところに気がつく

▽小村 吉賀の前で自転車を止める

吉賀

「あれ、小村君 どうしたの」

小村

「あ、ちょっと出かけてたんだ。吉賀は」

吉賀

「僕も、ちょっとコンビニに行ってたのd」

小村

「その割に、何も買っていないように見えるけど」

吉賀

「そうだね。行ってみたけど、別に欲しいものがなかったんだ」

小村

「そっか」

吉賀

「家に帰るところだったんでしょ」

小村

「そうだけど」

吉賀

「今日から、冬休み。しばらく、部活も休みみたいだから、しばらく会えないね」

小村

「そうだな。あ、みんなで初詣いくじゃないか」

吉賀

「そっか。みんなに会うの楽しみだな」

小村

「ああ、俺も」

吉賀

▽吉賀 少しさみしそうな顔をする

「まだ、時間あるなら、家に寄っていかない」

小村

吉賀

小村

吉賀

「もう、遅いけど、俺もまだ帰りたくないんだ」

「そうなの。実は、僕もなんか一人で家にいたくなくて。小村君さえよければ、寄っていった」

「そうだな。冬休みだし。ちょっと寄っていくか」

▽吉賀 顔が明るくなる

「うん」

Copyright@2026 D'S

□第二幕 吉賀の家のリビングで

○（クリスマスの夜）吉賀家のリビングで

小村、吉賀が ソファーに少し離れて座っている

▽小村 スマートフォンで家に連絡をしている

「じゃ」

▽小村 スマートフォンの通話を終わる

「よし、家には吉賀の家に行ってるって伝えからか大丈夫」

「じゃ、ゆっくりしていけるね。ところで、お腹すいてない。

僕、晩御飯 まだなの」

「あ、そう言えば 俺もだった。吉賀の顔みて安心したら、急に腹が減ったよ」

「クリスマスだし、ピザでも頼もうか」

「いいのか」

小村

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

「いいよ」

小村

「じゃ、ゴチになるか」

▽小村 下を向き、股間の辺りを見る

小村

「それと、シャワー貸してくれない」

吉賀

「どうぞ、使って」

小村

「それと」

吉賀

「それと」

小村

「パンツも貸してくれるかな」

吉賀

「そうだね。シャワー浴びたら、パンツも新しいのがいいよね。いいよ。あとで、持って行ってあげる」

小村

「何から、何まで、悪いな」

▽小村 バスルームの方に行く

(数分後)

○バスルームの脱衣場

シャワーブースでは小村がシャワーを浴びている音が聞こえる

▽吉賀 服を脱ぎ出す

▽吉賀 小村の脱いだ、パンツとジーンズが目につく

▽吉賀 小村のジーンズをたたもうと、手に取る

▽吉賀 小村のジーンズから異臭を感じる

吉賀

「小村君」

▽吉賀 小村の脱いだ物を洗濯機に入れる

○バスルームのシャワーブース

#吉賀の家のバスルームには、シャワーブースがある

▽吉賀 小村の横に並んで立つ

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

▽小村 シャワーと止める

「きたか」

「僕も、ピザ食べる前に、シャワー浴びておこうかなって思って」

「そうだよな」

「食べたあと、ゆっくりできるね」

「そうしよう」

▽小村 吉賀、シャワーの湯を出し、再びシャワーをあび始める

○（同）吉賀の家のリビング

小村、吉賀は、体育で使う、白のランパンを穿き、バスタオルで髪の毛を乾かしている

「ごめん。パンツの予備、無くなってた」

「いいよ、いいよ、気にしない」

吉賀

「大丈夫、それにそれ、サイズ間違えて買ったやつなんだ。小村君にあげるよ」

小村

「洗濯もしてくれたんだよな。いつも悪いな」

吉賀

「上の服も一緒に洗ってしまったけど、何か着る物のだそうか」

小村

「ううん、このままで大丈夫」

吉賀

「帰る頃には、乾いていると思うよ」

▽吉賀 小村、上半身は裸のまま、ソファーに座っている

#ピンポン#（呼び鈴が鳴る）

吉賀

「来た」

▽吉賀 インターフォンを取る

吉賀

「はい。すぐに開けます」

▽吉賀 上半身裸のまま、ドアの方に向かう

(数分後)

▽吉賀 ピザの箱を持って、リビングに戻ってくる

「この格好で、取りにいったかった」

「さすがに、その格好だど 驚くよな」

「ピザのお兄さん、寒くないですか だって」

「そりゃ、真冬の格好じゃないよな」

▽吉賀 ピザの箱を、机に置く

▽吉賀 ピザの箱を開ける

「うまそー」

「よし、食べよう」

「腹へったー」

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

吉賀

小村

(数分後)

○(同)リビング

吉賀、小村はピザを食べ終わり、ソファーの前の絨毯の上で、横になって話をしている

「腹一杯で、幸せ」

「僕も」

▽小村 身体を横に向け、吉賀の方を見る

「クリスマスはピザだよな」

「え、チキンじゃないの」

▽小村 上半身を起こす

「そうか、チキンを忘れてた」

▽吉賀 上半身を起こす

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

「じゃ、チキンも取ろうか」

小村

「もう食えないって。ほら」

吉賀

▽小村 腹を出し 手でさする

「本当だ。パンパンだ」

小村

▽吉賀 小村の腹の上をさする

「な」

吉賀

「うん」

▽吉賀 小村の顔を見つめる

小村

「吉賀、何。顔に、何か着いてる」

吉賀

「さっき、小村君のジーンズを洗濯機に入れる時、精液の匂いがした」

小村

「そ、そうか」

吉賀

「どうして」

小村

「俺、気がつかなかったけど」

吉賀

「ねえ。自分でしたの」

▽吉賀 さらに顔を近づける

小村

「えっと、自分とさええば、自分だけだ」

吉賀

「ちゃんと教えて」

▽小村 一呼吸

小村

「実は、さっき、夢前と会ってたんだ」

吉賀

「まさか、夢前さんと エッチしたの」

小村

「するわけないだろ」

吉賀

「じゃ、なんで」

小村

「その、キス、キスをしようして、夢前の顔に近づいて」

小村

「そしたら、急に 起ってきて」

小村

「急に射精してしまつて。だから、慌てて、帰ってきたんだ」

▽吉賀 小村から少し 顔を離す

吉賀

「ほんとうに、それだけ」

小村

「俺、吉賀に嘘ついたことあるか」

吉賀

「うん。わかった。じゃ、僕も話すけど、さっきまで、ここに、松子ちゃんがいたんだ。で、いろいろ有って、松子ちゃんが、僕のを扱ってくれたんだけど、ぜんぜん起たなくて、何もできなかった。松子ちゃん、怒ってるだろうな」

小村

「そんなことが合ったのか。だから、今日はおとなしかったんだな」

吉賀

「おとなしいって」

小村

「最初見たとき、泣きそうだったぞ」

吉賀

「そんなわけないよ」

小村

「うそうそ。でも、ちょっと落ち込んだ雰囲気はあったかな」

吉賀

「小村君には、隠せないね」

小村

「俺たち、面白いな。俺は、射精して、吉賀は射精できないって」

吉賀

「ほんとうだ、面白いね」

▽吉賀 小村の顔をじっとみる

小村

「何」

吉賀

「ううん。なんでも」

▽吉賀 さらに、小村に顔を近づける

小村

「どうしたの」

▽吉賀 目を瞑り、小村の顔にさらに近づける

▽吉賀 小村にキスをする

▽小村 驚き目を大きくするが、目をつぶり、吉賀のキスを受け止める

(数秒後)

▽吉賀 小村とのキスをやめ、目を開ける

▽小村 目を開ける

「ね、射精した」

「いいや大丈夫だった。そっちこそ、勃起した？」

「うん。こんなに」

▽吉賀 小村の手を自分のランパンの上に持っていく

▽小村 吉賀の陰茎をランパの上から握る

吉賀

小村

吉賀

小村

「本当だ。勃起してる」

吉賀

「でしょ」

▽吉賀 もう一度、小村の顔を見る

▽吉賀 小村をゆっくりと押し倒す

▽吉賀 小村の胸の上に頭を付ける

▽吉賀 耳を小村の胸に付ける

吉賀

「心臓、めっちゃ鳴ってるよ」

小村

「俺、今、すげえドキドキしてる」

吉賀

「もっと、ドキドキさせてあげる」

▽吉賀 小村の乳首の先を指先で触る

小村

「あっ」

吉賀

「小村君の乳首って、かわいいよね」

小村

「そうかな」

吉賀

「こっちも、かわいいよね」

▽吉賀 小村のランパンの上から小村の陰茎を握りゆっくりと扱く

吉賀

「ねえ、もう一回出してみる」

小村

「さすがに三回はないでしょ」

吉賀

「そうかな」

▽吉賀 手を小村のランパンの中に入れ、小村の陰茎を握る

吉賀

「こは、早く出してって言ってるよ」

小村

「どうしてかな」

▽吉賀 小村の上半身の上で、四つんばいになる

小村

吉賀

小村

吉賀

▽吉賀 小村の乳首を舐める

「あつ、よ、よしが、だめ」

「かわいい声。もっと出していいよ」

「あ、あ、あ、いい」

▽吉賀 四つんばいの状態

▽吉賀 小村の胸を舐め回す

▽吉賀 少し下がり 小村のヘソの周りを舐める

▽吉賀 小村のランパン上から、ガチガチになった陰茎を舐める

白いランパンが吉賀の唾液で濡れ、透けてくる

「皮かむりちゃん。カワイイ」

▽吉賀 小村の膝に座る

▽吉賀 小村の太股をさすりながら、ランパンの中に両手を入れる

小村

「あん、あん」

吉賀

「気持ちいいの」

▽小村 両手顔の上で組み顔を隠す

小村のワキ毛が見える

吉賀

「ワキ毛も素敵だよね」

▽吉賀 ランパンの中で、小村の陰茎を激しく扱う

▽小村 腰を振り始める

▽吉賀 小村のランパンの裾から、陰茎を取りだし 口に咥える

小村

「うん、あ、うん」

▽吉賀 ランパンの裾か、自分の陰茎を取り出す

小村

吉賀

吉賀

小村

小村

▽吉賀 自分の陰茎と小村の陰茎を握り 腰を振りながら扱きだす

「あ、あ、あう」

「うん、うん、うん」

▽小村 吉賀、腰を振っている

「ねえ、入れている？」

「うん」

▽吉賀 小村のランパンを脱がす

▽吉賀 自分のランパンを脱ぐ

▽吉賀 自分の陰茎を小村の肛門の入り口に当てる

▽吉賀 自分の陰茎を持ち、小村の肛門から入れようとする

「だめ、やっぱり、だめ」

吉賀

▽吉賀 手を放す

「ごめん」

▽小村 上半身を起こす

▽小村 吉賀を見つめる

▽小村 吉賀に顔を近づける

▽小村 目を瞑り、吉賀にキスをする

(数秒後)

▽小村 キスを止める

▽小村 吉賀の顔を見る

「ごめん。やっぱり、ケツは無理だよ」

「ごめん 僕が無理矢理やり」

小村

吉賀

吉賀

▽小村 吉賀を横に寝かせる

▽小村 吉賀の上に跨がる

▽小村 吉賀の乳首を舐め回す

「あん、あん。こ、こむらくん」

▽小村 吉賀の胸を舐め、腹、ヘソを舐める

▽小村 吉賀の陰茎を口に咥え、頭を上下に動かしたす

▽吉賀 腰を上下に動かす

▽小村 口を離し、吉賀の陰茎を握り扱きだす

「あ、あ、あう、い、いきそう」

「あう」

吉賀

吉賀

▽吉賀 射精する

勢いよく精液が飛び出し、吉賀の腹の上に散る

▽小村 吉賀の陰茎をゆっくりと扱く
亀頭の割れ目から残った精液が搾りだされる

(数秒後)

○吉賀家のリビング

吉賀 小村 ランパンだけを穿いて、仰向けに並んで寝転んでいる

「ちゃんと いったじゃないか」

「うん。小村君のおかげ」

「そうかな」

「今度は僕が、小村君が すぐに射精しないように、寸止めで鍛えてあげる」

「寸止めてなんだよ」

「いいから」

▽吉賀 横向きになり、片手で頭をささえる

▽吉賀 空いた方の手で、小村の乳首をさすりだす

「くすぐったいよ」

「ふふふ」

▽吉賀 頭を小村の胸の上にもっていき、乳首を舌先で、つつき出す

「あ、あ、あう」

▽吉賀 小村の顔をじっとみる

「小村君、乳首 弱いんだね」

「しょうがないだろ」

「どっちが感じるのかな」

▽吉賀 手を下にずらし、小村のランパンの中に手を入れ陰茎を握る

「こっちも、ビンビンだね」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

吉賀

小村

▽吉賀 小村の亀頭の先を指先で撫でる

「あ、あっ」

▽小村 身体を左右にひねり、腰を上下に動かす

吉賀

「感度いいよ」

▽吉賀 小村の陰茎を握り扱きだす

小村

「あ、あ、あ、や、やばい」

▽吉賀 扱くのをやめる

▽小村 動きが停まる

▽吉賀 小村の陰茎を扱く

小村

「あ、あう」

吉賀

「気持ちいい」

小村

「やばいって、直ぐに射精しちゃうよ」

吉賀

「がまん、がまん」

小村

▽吉賀 小村の陰茎を扱く

「で、でそう」

▽吉賀 扱くのを止める

吉賀

「小村君を いじめるの面白い」

小村

「もう。許してくれよ」

▽吉賀 小村の陰茎を扱きだす

小村

「もう、もうだめ」

吉賀

▽吉賀 ランパンから手を出し、ランパンの上から小村の陰茎を握り扱きだす。
「いって いいよ」

小村

「もう、もうだめ。うっ」

▽小村 腰を大きくもちあげ、足がピンと伸びる

▽吉賀 小村の陰茎をゆっくりと扱く

小村のランパンの亀頭を包んだ部分から、精液が滲み出てる

吉賀

「いっちゃった」

▽吉賀 小村の横に寝転ぶ

▽吉賀 横を向き 小村が上を向いて、荒々しく呼吸しているのを見る

吉賀

「どうだった」

▽小村 吉賀の方を向く

「気持ち良すぎるよ」

小村

吉賀

「よかった」

▽小村 吉賀のおでこにキスをする

▽吉賀 小村の上に乗って抱きつく

▽吉賀 顔を上げ、小村の顔を見る

「僕、小村君のこと、最初にあった時から好きだったんだ」

「え、俺」

「うん」

▽吉賀 小村の胸に頬を押し当て、ギュッと力を込めて抱きつく

▽小村 吉賀の身体を両手で抱きかかえる

「俺、わかんないや」

「今は、夢前なのが気になっているし」

「うん。わかってる」

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

吉賀

小村

吉賀

「だから、吉賀のことは まだわからないよ」

「いいの。今は、こうしているだけで」

▽吉賀 小村の顔を見る

吉賀

「僕って、変かな」

小村

「そんなことは無いよ」

吉賀

「だって、男どうしだよ」

小村

「そうなんだけど、不思議と吉賀なら、受け止められるよ」

吉賀

「本当？怒ってない？」

小村

「怒るわけないだろ」

吉賀

「よかった」

▽吉賀 もう一度、小村に抱きつく

吉賀

小村

吉賀

小村

「とっても、気持ちいいよ」

「俺も。なんか不思議」

「シャワー浴びに行こうか」

「そうだな」

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

〜クリスマス特別編〜

おわり